接触場面に向かう外来性管理
― 中国人居住者の移動のライフストーリーに関する事例研究

Foreignness Management towards Contact Situation:
A Case Study about Life Stories of Chinese Residents in Japan

鄒　暁依
ZOU Xiaoyi

要旨　本稿では、日本に住む外国人居住者の接触場面に向かう管理（村岡 2010a）のうち、自分の外来性（Neustupný, 1985、フェアブラザー 2003）をどのように認識し管理しようとしているかについて、日本に長期滞在している中国人居住者の国際的な移動過程に焦点を当てた事例研究をつうじて考察することを目的とする。２名の滞日11年の中国人居住者（CR1とCR2）を対象に分析した結果、日本の物的な異文化要素に対して肯定的に評価しており、適応が進んだことが定住の要因となったことが明らかになった。一方で日本人の思考や行動様式の異文化要素に対する評価については居住者によって差が見られた。CR1は日本人の思考や行動様式を否定的に評価し、相手（日本人）規範に消極的に従い、日本人ネットワークへの参加も家庭領域に限っていた。CR2は肯定的に評価し、相手規範に積極的に従い、日本人ネットワークを拡げていた。また、日本語を意欲的に習得することによって、外来性を軽減しようとしていることも示唆された。

１．研究目的

本研究は、日本に長期滞在している中国人居住者の国際的な移動過程に焦点を当て、移動または定住に関わる要因を探り出すことを通して、居住者の日本語に対する意識や態度を明らかにし、接触場面の外来性管理（フェアブラザー 2003）の実態を究明することを目的とする。

外務省の在留外国人に関する統計によると、1990年代末から日本に入国した外国人者数は急増し、そのうち留学と就学の資格で来日した人は特に多い。その中でも中国人留学生者数が最も多く、2012年末現在は113,980人で全体の63%を占めており、国籍別で１位になっている（法務省在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表 http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001111233）。このような留学生は卒業後、帰国する場合も少なくないが、就職や結婚などにより在留し続けることも多く、永住者と日本帰化への移行が進んでいる（田嶋 2010:55）。

就職した時点では、日本に定住したいという意識はまだないかもしれないが、働きながら様子を見る人は多くいる。また、結婚適齢期にある人が多く、留学期間中に結婚し、配偶者を日本に呼び寄せて住み付いたり、日本人と結婚して帰化する人もいると思われる。こうした中国人居住者のような長期滞在者の場合には、日本語能力も上達し、社会適応もかなり進んでいると考えられるが、そのためか、第二言語習得の領域においても、文化適応の領域においてもかれらの言語問題を取り上げることは少ない[1)]。しかし、長期滞在す

1)　非漢字圏出身の非母語話者が日本語の文字情報に対する言語管理を考察した金子（2002）や、留学経験を持つ韓国人居住者の言語使用を通時的共時的観点から考察した今（2011）など、接触場面での言語管理研究において居住者の言語使用についての調査が行われている。

ることによって日本語が堪能になった場合でも、外国人居住者の外来性は依然として存在する。そうした外来性は、一方では当事者として解決しがたい問題であるが、他方では日本語母語話者との接触経験が豊富なため、一部については自分で認識可能な問題でもあると考えられる。つまり、実際の接触場面インターアクションにおいて、それらの外来性がどのような結果をもたらすことになるか、外国人居住者はある程度まで予測することができると思われる。さらに言えば、外来性による逸脱は意識的に利用されたり、回避されたり、イングループの指標とされたりするものであり、外国人にとっては場面に応じて管理可能なものとして考えることができる（村岡 2010b）。

このような外来性に対する管理は、中国人居住者の日本語使用にも影響していると考えられる。本稿では、2000年頃に留学の目的で来日したあと、現在も日本で生活している中国人居住者に焦点を当て、自分の外来性をいかに認識し、対処しているかを見ていく。それによって、長期滞在者の日本語習得及び言語管理を解明するための一つのポイントとなるだろうと考えられる。

2．先行研究

外国人居住者についての研究は、在日朝鮮・韓国人を対象としたエスニック・アイデンティティについての研究が多くある（林 1987、江淵 1988など）。中国人についても長期に渡り、アンケートやインタビューを通して居住者の生活様式や居住環境など様々な面から記述した奥田・鈴木（2001）や奥田・田嶋（1993）などがある。

さらに国際的な移動の経緯が居住者の言語生活に影響を与えることに注目して、中国人私費留学生の場合に、来日以前から海外とのつながりを持っていることが移動の契機となり、さらに来日後の就労や生活適応のあらゆる面に一定の影響を与えていることが指摘されている（田嶋 2010）。また、塞漢卓娜（2011:22）は日本の農村部に住むアジア系外国人女性は、ジェンダーとエスニシティの関係以外に、日本の都市－農村という不均衡な関係の下に置かれ、諸々の力関係の末端に位置づかせられていると述べている。塞漢卓娜（2011）はこのような多重に周辺化された日本の農村に嫁いだ「中国人嫁」のライフストーリーを考察した。日本留学の経験を持つ母親は、外国人として日本で暮らすことに不安や疎外感を感じていることが指摘されており、「外国人嫁」としての外来性に対して否定的に評価していることが読み取れる。

外国人の外来性については言語管理研究の研究者たちがこれまで精力的に調査をしてきた。日本に長期に滞在している中国人居住者は日本語の上級話者であっても、外来性に関する問題を持っている。そのような外来性の問題はすべてを解決することが難しく、解決できない問題も存在している（ネウストプニー 1985）。そのため外来性の問題は、使用者が問題をいかに管理していくかが重要になってくると思われる（村岡 2006）。

今（2011）では、言語バイオグラフィーによる言語態度と現在の言語環境という通時的共時的な手法を同時に用いて、韓国人居住者の言語管理を考察した。言語バイオグラフィーについて、半構造化インタビューを通して現在の日本語使用の来歴を探り、現在の言語環境について、領域（domain）の概念を取り入れ、教育、仕事、交友の 3 つの領域から考察した。そのほかに家族、宗教の領域もあることはロメイン（1997）で紹介されている。接触場面に参加する際の言語に対する態度や意識は、習慣化された言語に対する行動

であり接触場面に向かう管理と呼ばれている（村岡 2010）。

本研究では、今（2011）を参考に、CRの言語態度と現在参加しているネットワークの言語環境から、通時的分析と共時的分析を通して、CRの接触場面に向かう管理を明らかにすることを試みた。そのために、CRにライフストーリーを語ってもらい、そこから国際移動及び定住に関わる意識変化と言語態度を探る。ライフストーリーのデータを整理するには、「今までの人生」と「これからの人生」のように時間の流れで区分することができ、語りの要素として客観的事実と主観的事実があり、ライフストーリーのストーリー性に直接かかわる主観的事実（出来事間の因果的＝物語的関連性）が重要であると大久保（2009）は述べている。

3．調査概要

3.1.　調査協力者

本研究は中国人居住者が異文化環境における自身の外来性に対する意識と接触場面に向かう管理を明らかにすることを目的としており、協力者に対して以下の条件を設けた。現在の国籍は特に問わないが、(1) 滞在期間が 5 年以上であること、(2) 成人してから来日したこと、(3) 母語が北京語であること、(4) 来日当時の在留資格が長期滞在できる私費留学または家族滞在であること、という 4 つの条件を満たしたCRを対象とした。CRの適応過程は多様であるため、少なくともこれら 4 つの条件を課すことで、客観的な背景をある程度統一することができ、外来性および接触場面に向かう管理の相違を比較することができると考えた。今回の分析で取り上げたのは、滞日11年で私費留学の経験を持つ中国人居住者 2 名である。二人の詳細なプロフィールを下記の表 1 に示した。

表 1 ：協力者のプロフィール

	CR1	CR2
年齢	42	34
性別	女	女
出身	遼寧省	福建省
来日時期	2000年 4 月	2001年 4 月
滞日家族	夫（日本人）、娘（18歳）	夫（日本人）
調査時の滞日年数	11年	11年
日本語能力	２級（2001年取得）	１級（2002年取得）
現在身分	日本国籍（2007年取得）	日本国籍（2011年取得）

3.2.　調査方法

本調査では基本的に非構造化インタビューを実施し、CRのライフストーリーを収集した。ただしインタビューに向けて、必要最低限の質問項目を事前に準備した。具体的には、来日前から来日後、そして将来の計画までCRのライフコースに沿って調査者が質問をし、それを軸に協力者に関連するライフストーリーを自由に語ってもらう。インタビューの際の主な質問項目として、来日前の生活環境及び日本留学の理由、そして来日後の生活変化、今後の人生計画及びその理由、日本という国または日本語についての評価や個人的な感情についても尋ねた。そのほか、協力者の語りが不十分であると判断した場合

は、調査者によって随時、質問を追加した。インタビューはそれぞれ 2 回行い、一人当たりの収録時間は約 2 時間半であった。インタビューでの使用言語は基本的に協力者の母語である中国語を使用し、協力者によって日本語が混入することもある。なお、本稿の分析で使用しているCRの語りは筆者による翻訳を提示している。

3.3. 分析の枠組み

収集した調査協力者の語りについて次の 3 つの視点から整理し、分析を試みた。

(1) 時間軸に沿った分類

大久保（2009:36-37）では、語られたライフストーリーを「今までの人生」と「これからの人生」に区別し、客観的事実と主観的事実に分けて説明することができると述べている。本研究は大久保を参考に、CRの「今までの人生」を来日前と来日後の生活に分け、「これからの人生」を定住か再移動かという三段階に分け、さらに客観的事実と主観的事実から記述した。

(2) 移動・定住の要因の分類

それぞれの段階での語りには、CRの移動または定住に影響していた社会状況や家族、また本人に固有の事情などが語られていた。本稿ではそうした要因を抽出し、「社会的要因」「家庭要因」「個人要因」に分類した。

(3) 領域ごとの言語環境と言語管理の分析

CRの言語管理または言語使用に対する意識は、二人の現在の生活環境を形成しているネットワークによってバリエーションがあることが予測された。たとえば、親密度が高い家庭領域では言語管理はほとんど行われないと考えられる。そこで、ロメイン（1997）と今（2011）を参考にCRが参加しているネットワークを（1）公共領域、（2）職場領域、（3）友人領域、（4）家庭領域に分けて、それぞれの領域の言語環境及び参加する際の言語管理を考察することにした。

4．調査結果

4.1. 移動前の生活状況と移動に関わる要因

CRの移動前の生活状況について、（1）当時の社会的状況として移動の促進要因と考えられる＜社会要因＞、（2）家族構成員による影響としての＜家庭要因＞、（3）移動に関わるCR本人の意識としての＜個人要因＞から考察する。

4.1.1. CR1の場合

移動に関わる語りを客観的事実と主観的事実で整理すると、下記のようになる。

(1) 客観的事実：

・大学卒業後、結婚して娘が生まれた。
・省級の大病院で 9 年間勤務していた。
・日本の医療技術は世界のトップレベルである。
・大学時代に日本語を学んだことがあり、留学を考えた時から再び日本語を学び始めた。
・仕事を辞め、娘を残して一人で日本に留学した。

(2)　**主観的事実：**

・夫に期待を持って待っていたが、あきらめた。
・日本に医学の知識を求めに留学したいと思うようになった。
・新しい道を切り開き、娘と一緒に暮らせる幸せな生活を求めたい。

さらにCRが日本への移動に対してどのような期待をもち、またどのような移動の目的があったかをさぐるため、社会・家庭・個人の三つの面から考察した。

(1)　**＜社会要因＞**

CR1の語りに現れた移動に関わる社会的な要素として、日本の高度な医療技術が述べられた。日本留学の理由について、CR1は次の例 1 のように語っている。なお、語りのかっこ内はインタビュアーの言葉である。

例 1 ：「私自身は医学を勉強して、その後病院で勤務していたじゃないか。（ER：そうですね。）そして、日本の医療技術は世界的にもトップレベルで、（ER：あー、それで。）だから当時は医学の知識を深めるために日本に行こうと思った」。

このように、日本の医療技術が高く評価されていることは、CR1自身の専門及び職業にも関連しており、CR1に日本への留学の気持ちを強くさせた一つの社会要因であったと考えられる。

(2)　**＜家庭要因＞**

CR1は、来日前にすでに仕事をして親から独立しており、結婚もして子供も生まれていた。しかし、下記の語りから、CR1の夫に対する不満が蓄積して、結局夫の考え方が変わることを待ちきれず、家庭から飛び出したいと考えるようになったことが分かる。

例 2 ：就職してすぐ、私たちは結婚した。（ER：ええ。）けど、そのあと、彼が自己中心的な性格で、思いやりもなくて、向上心もないことに気付いた。（ER：そうなんだ。）（中略）それでも好きだったから、いつか変わってくれることを信じて待っていたけど、何年も経って、彼が変わることは不可能だとわかった。（ER：うん、人を変えることもできないですからね。）だからもう、自分がなんとかしないといけない。彼については完全にあきらめた。

(3)　**＜個人要因＞**

CR1は生活水準の向上をのぞみ、キャリア形成に対しても上昇志向を持っていた。しかし、「私たちの考え方は真逆で、話が合わないし、喧嘩ばかりしていた」と話しており、CR1の上昇志向が夫と強く衝突したことが分かる。 9 年経っても夫の考え方に変化がなかったことを見てあきらめたCR1は、「その時、大学時代に日本語を学んだことがあったことを思い出した。だから、日本に留学しようと決めた」ことから、日本留学が現状から脱出する手段であったと考えられる。

CR1の語りを要約すると、CR1は中国で医療関係の大学を卒業した後、省内の大きな病院に看護師として勤務していた。その間、CR1は結婚をして娘も産まれたが、夫に対する不満が積り、結婚 9 年目で関係修復をあきらめた。その時、大学時代に日本語を勉強していたことを思い出し、日本の先進医学を学びたいことを理由に留学しようと決心した。そして、周囲に羨まれる仕事を辞めて、さらにまだ 8 歳の娘を中国に残して留学に来た。こ

のように、CR1の日本移動について主に自分のキャリア・アップと夫婦関係が語られた。

以上のように、CR1の日本移動には日本の医療技術の高いレベルや、個人の上昇志向などに影響されてはいるが、周りから羨まれる仕事を辞め、8歳の娘を手離してまで日本に留学した要因であるとは考えにくい。CR1が移動をした最も根本的な要因は夫婦の価値観の不一致に耐えきれず、現状から抜け出すことにあった。医学を学ぶという理由は、移動の理由ではなく、移動を実現するための手段であったと考えられる。

4.1.2. CR2の場合

CR2の語りから見られた移動に関わる客観的事実と主観的事実は次のとおりである。

(1) **客観的事実：**

・幼少期は両親の故郷の間で、何年かおきに引越しを繰り返した。
・叔母が日本で店を経営し、母が手伝いに日本に来ていた。
・師範短期大学を卒業した。
・アメリカに留学中の友人と連絡を取っていた。

(2) **主観的事実：**

・日本アニメなどの影響で、子供の時から日本に興味があった。
・引っ越しを繰り返したせいで、故郷意識がない。
・叔母と母のおかげで、日本は身近な存在となり、留学しやすくなった。
・母の期待に応えたい。
・安逸な職場環境に不安を覚えた。

CR1と同様に、ここではCR2の移動に関わる要因を分析した。

(1) **＜社会要因＞**

CR2の場合は、職場環境が移動に関わる社会要因として語られている。来日する前、CR2は学校の教師となって半年ほど働いていたが、その時の状況について下記の例3のように述べている。

例3：「仕事はとても楽だったよ。家に帰っても買い物や散歩ぐらいしかしない。（ER：へー、すごいのんびりしていますね。）同僚も自分が担当することだけをやって競争しない。（ER：いいんじゃないですか？）でも、こんな環境にいると、自分の成長によくないと思う。」

つまり、CR2は過度に安逸な職場のままで生涯を過ごしてしまう、と将来について不安を感じている。また、当時中国では留学する若者が激増し、CR2の友人の中にも留学した人が多かった。特に、「アメリカに留学している友達がいるから、時々連絡するの。中国にない新鮮な出来事を教えてくれたり。それで、私もようやく海外に行ってみたいと思った」ことが、CR2の移動に影響を与えていることが分かった。

(2) **＜家庭要因＞**

CR2が高校に入った時から、CR2の母は日本で店を開いた叔母を手伝いに日本で生活し始めた。「母や叔母からよく日本の話を聞いていた」ことにより、CR2にとって日本は身近な国となった。また、「母はずっと私の学歴を残念に思っていて、せめて四年制大学を出てほしいと何回も言っている」ことを話しており、CR2に留学を勧めていた。例4では

自分の日本留学には母の存在が最も大きかったことを話している。

例４：「母と叔母は日本にいるじゃない？（ER：うん。）それで自然に日本のことが耳に入った。だから、留学するなら当然日本だと思って、母がいるから。（ER：ああ、お母さんがいると安心ですね。）そう、そのあとの留学の手続きとかも全部母がやってくれた。」

(3)　＜個人要因＞

CR2は子供の時から日本のアニメやドラマをよく見ていた。それについてCR2は下記の例５のように述べている。

例５：「日本のドラマやアニメって、特に外見とか性格も可愛いじゃない？登場人物の。（ER：あ、確かに。）それがすごく好きだった。あと日本語の主題歌も好きで、意味が分からなくてもまねたりしていた（笑）。」

ここからCR2の日本文化及び日本語に対する感情が読み取れるだろう。日本留学が決まった後、CR2は独学で日本語の勉強を始め、意欲的に取り組んでいた。このように、CR2が日本のアニメやドラマを通して、日本及び日本語について興味を持っていることは、今後の異文化要素の習得や適応したいという意欲に関わっていると考えられる。

CR2の語りを要約すると、両親それぞれが福建省と上海の出身で、CR2は何年かおきに両地域間で引越しを繰り返していた。そのため、自分の故郷はどこなのか分からないと感じている。CR2が高校に入った時から、母は日本で店を経営している叔母を手伝いに日本で生活し始めた。CR2は師範短期大学を卒業した後、教師として半年仕事をしていた。しかし、過度に安逸な職場であったため、CR2は将来について不安を感じるようになった。母は学歴が重要であると考えており、娘が短期大学を出ていることについて、せめて四年制大学の学歴が必要だと何度もCR2に日本留学を勧めていた。また、アメリカに留学中の友達からもアメリカの話などを聞かされ、CR2はようやく海外に行ってみたいと思うようになった。日本に留学することが決まってから、CR2は日本語を３か月ほど独学して来日した。

以上のように、CR2の日本移動には、CR2自身の日本に対する好意に加え、当時の中国の職場事情に影響される部分があり、さらに海外にいる友人や親族の日本滞在及び母親の願いとも大きく関係していることが分かった。特に、インタビューの報告では、「母に留学を勧められた」「母は私に学歴を取得してほしい」「ちょうど母は日本にいるから」など母親について語られた内容が多かった。つまり、「母の願いに応えたい」気持ちと「母がいるから安心だ」というように、CR2の日本移動には母親からの影響が最も重要であると考えられる。

4.2.　移動後の生活

CR1とCR2の来日後の生活環境の変化及びそれに対するCRの評価や意味づけについて分析する。両者ともに2000年頃に来日し、就学－留学－就労－帰化－国際結婚の過程を経て定住に至ったことが明らかになった。

4.2.1.　CR1の場合

CR1の11年間の滞日生活を客観的事実と主観的事実から以下のようにまとめた。

(1)　**客観的事実：**

・学校に通いながら、毎日二ヶ所でアルバイトをしていた。
・医学大学ではなく、英語の専門学校に進学した。
・卒業後、整体院を開業し、投資ビザを取得した。
・日本の国籍を取得してから、整体院を閉め、アルバイトを始めた。
・日本人と結婚し、改名した。
・中国にいる娘を呼び寄せた。

(2)　**主観的事実：**

・日本でかかる費用と国への仕送りのために、とにかくアルバイトをしなければならなかった。
・在留資格を得て日本で生活していくために、アルバイトを維持できる専門学校を選んだ。
・ビザのために、整体院を開業した。
・国籍を取得すると、ビザや就労の制限がなくなり、収入がよく自由なパートができるから、帰化した。
・娘を日本に呼び寄せ、自分の大きな目標が達成できた。

CR1が来日する当時の「いつか娘と一緒に住みたい」という語りと現在の状況についての次の例 6 の語りから、それまでのアルバイト漬けの生活も、在留資格を更新する過程も、娘を呼び寄せるための環境づくりであったと考えられる。

例 6 ：「やっと娘を日本に呼び寄せることができたから、今はもう何の心配もない（笑）。生活を楽しむだけだ。」

専門学校への進学や整体院の開業及び帰化により、CR1が安定した生活を入手するまで日本に在留し続けることができるように進路を決めていたことが分かる。そして、「たくさん調べたけど、この学校の学費は一番安かった。それに夜間コースもあるから、 3 時間ぐらい行くだけで、朝と夜のバイトもそのまま続けられる」という専門学校を選択する際の理由や、「今は日本国籍だから、アルバイトの制限がない。（ER：何をやってもいいですよね。）だから、夜は食品工場で週 4 でやって、昼間は週に 3 回だけど、介護施設で働いている」という帰化後の変化が語られた。このように、CR1がアルバイトを中心に学校または在留資格を決めたことは、まさにCR1の「安定した暮らしを築きたい」という移動の目的を反映していた。

4.2.2.　CR2の場合

CR2の語りを以下のように整理した。

(1)　**客観的事実：**

・日本語学校の一番上級レベルのクラスまで進み、短期間で日本語能力試験の 1 級に合格した。
・国立大学の学部に合格し、日中の食文化を専攻した。
・卒業後、建設会社に就職して現在に至る。

・日本の国籍を取得した。
・日本人男性と結婚し、改名した。

(2)　**主観的事実：**

・負けず嫌いな性格で、日本語も好きなため、母語話者レベルまで習得したい。
・文系出身で事務職に就くなら、業種に関係なくどこでも同じだろうから、それより職場の環境や人間関係を優先して選ぼうと思った。
・定住資格か帰化するかを家族に相談したら、帰化を勧められた。
・自分は特に国籍には拘りがないが、日本で生活し働いているから、日本国籍のほうが便利な時が多い。
・結婚した際に、夫家族に勧められため、日本人名に改名した。

このようにCR2の場合は、日本語や日本文化に対して興味があり、大学の日本文化学科で日中の食文化を専攻した。卒業後の進路について、「周りの日本人学生も留学生も就職活動をやっていて、単なる留学経験よりは、日本で２、３年の仕事経験を積んだほうが有利だと皆が思っている」と語っていた。日本で就職して経験を積みたいと考えていたことからも、CR2が意欲的に文化習得をはかっていたことが分かる。

4.3.　定住及び再移動に関わる要因

4.3.1.　CR1の場合

CR1は日本への定住意識が強く、帰国あるいは他国への再移動の可能性が全くないと報告している。なぜCR1は生涯を過ごす地を日本と決めたのか、インタビューの語りからその要因を分析する。まず、CR1のインタビューで観察できた客観的事実と主観的事実から、日本定住あるいは再移動に関わる要因を分析する。

(1)　**客観的事実：**

・静かな町に一軒家を購入した。
・ヨーロッパ旅行に行った際に、不適応で体調を崩した。
・国にいる両親の面倒は兄弟が見ており、CR1は仕送りをしている。
・娘の来日を夫家族が喜んで受け入れた。
・一時帰国の回数が減った。

(2)　**主観的事実：**

・日本での安定した生活が、国籍の取得と家の購入によって実現できた。
・娘と一緒に暮らすことが夢だった。
・兄弟がいることで、親の面倒を心配する必要がない。
・日本の食事に慣れ、口（好み）が変わったから、もうどの国にも行きたくない。

今後は再移動するかどうかについて、日本への移動についての分析と同様に、(1) 社会要因 (2) 家庭要因 (3) 個人要因からCR1が日本に居住することに対する評価を考察した。

(1)　**＜社会要因＞**

CR1が暮らしている地域は東京近郊で静かな町であるが、2005年に新たな電車路線が開

通してから、秋葉原まで20分程度で行けるようになった。そして、「今は駅前が開発されて何でも揃っているからとても便利、うん。（中略）静かだけど、何の不自由もないこの町は生活するのに一番適している」と現在の居住地の環境に対する満足感が語られている。また以前、日本人の夫と一緒にヨーロッパ諸国へ旅行に行った際に、食事からサービスまで不慣れのため、体調を崩した経験があった。それをきっかけに、「他のどの国でもなく、日本は自分に一番合う」ことに気づき、日本で生涯を過ごそうと決心した。

(2)　＜家庭要因＞

外国に定住を決める際にCRの家庭及び両親への配慮がされて出された結論であると予想できる。CR1の語りからも家族に関する内容が報告された。まず、中国にいる両親について「親は兄と一緒に暮らしているから、特に面倒を見る必要もない。（ER：じゃ、仕送りとか。）あ、仕送りは毎年している」と親の老後を見るために帰国する必要はないことが分かる。また、日本にいる家族については次のように述べている。

例７：「私は今の夫と夫の家族に可愛がられているし、娘のことを打ち明けたら、「なんで早く言ってくれなかったの？ずっと子供が欲しかったよ」と言ってくれた。（ER：えー、よかったですね。）そう、すごく喜んで受け入れてくれた（笑）。」

この報告から、CR1は日本での家庭にも満足していることが分かる。このように、娘が来日し、日本人家族ともうまくいっており、中国にいる親族への心配もなく、母国へ帰国する必要性がなくなったと言える。

(3)　＜個人要因＞

CR1によると、中国への一時帰国が年１回から、二～三年に１回になり、中国で特に食べたい物もないので、国に帰りたいとも思わなくなったという。また、下記の例８のように、ヨーロッパ旅行を経験してから「人間は口から変わるものだ」という認識ができたようだ。インタビューを通して「人間は口から変わる」を真理として何度も語り、それによって、今後の居場所は日本であると決めたという。

例８：「フランスとかも全然慣れなくて、食べ物も食べられないから、二日目から体調が崩れて倒れたの（ER：へー、そんなに）。それで「日本に帰りたい」と泣きながらに（笑）。もう日本の味に慣れたから、人間って口から変わるんだなぁと実感した。（中略）中国に特に食べたい物もないし（ER：中国でしか食べられない物もあるのに）。いや、今は中華料理はもうどうでもいい。食べたいとは思わない。（中略）うん、やっぱり人間は口から変わる。うん。」

このように、CR1は現在暮らしている地域の環境にも家庭環境にも満足しており、自分の親と娘への心配がなくなったことが中国に帰国する可能性をなくすことの重要な要因である。そして、インタビューで何度も強調された「口が変わった」ことは、ヨーロッパ旅行を経験してから、他の国の料理が口に合わなくなったことに気付いたのであり、CR1自身による日本定住の正当性を裏付けているとも考えられる。

4.3.2.　CR2の場合

CR2のインタビューにおける再移動の可能性についての語りを下記のようにまとめた。

(1)　**客観的事実：**

・小学校時代まで、頻繁に引っ越していた。
・大学を卒業して以来は、同じ職場にずっと勤務している。
・日本人と結婚した。
・日本の国籍または永住権を持つ親族が多い。
・中国に一時帰国した際に、友人や親族との接点が少なく、共通話題がない。交差点を渡ることができず、買い物やバスに乗ることに躊躇することがある。

(2)　**主観的事実：**

・頻繁に引っ越しをしていたため、故郷の意識はあまりない。
・人間関係を重視して選択した職場は居心地がよく、同僚でありながら友人とも言える。
・中国にいる友人や親戚との関係が疎遠になったと感じた。
・日本社会に慣れたので、逆に中国の普通の生活ができなくなった。

以上の語りを社会的な要因、親族などの家庭要因、及びCR2の個人要因から、定住に関わる要因を分析する。

(1)　**＜社会要因＞**

CR2が日本に長期滞在していることによって、例 9 のように中国に一時帰国する際に不自由が生じたという。

例 9 ：「交差点が怖くて渡れないとか（ER：みんな信号を守らないからね）（両者笑い）。そう、あと、ファーストフードでの買い物もバスに乗ることもできなくなった（笑）（ER：ああ、確かに）。行列に並ぶのに慣れたからもう。」

CR2は日本社会の行動様式や規範を習得したことで、それに基づいて母国社会を評価するようになり、母国への再適応が困難になったと言えよう。

(2)　**＜家庭要因＞**

4.1でも述べたように、CR2の両親はそれぞれ福建省と上海の出身で、CR2は何年かおきに両地域の間で引越しを繰り返していた。そのため、CR2はどちらの方言も完全に習得できておらず、子供の頃はよく引っ越して故郷の概念がないと報告している。また、親戚の人は日本や他の省にいて福建省にいる人はほとんどいないことから、CR2は中国に帰ることができる「家」をすでに失っていると言える。永住資格を取得することができるようになった時は、日本にいる親戚の叔母たちも永住資格を持っていたり帰化した人もおり、皆に帰化を勧められたという。このように、CR2には故郷意識がないこと及び帰化した家族の存在により、日本に帰化することに対して抵抗感がなかったと言える。

(3)　**＜個人要因＞**

CR2によれば今は家庭も仕事も、生活の全てが日本にあるためとても満足しており、全てを捨て移動する理由はまだないという。また、例10のように、中国を長年離れていたため社会の変化も友人の状況の変化についても分からないと述べている。

例10：「一時帰国を重ねていくうちに、だんだん中国にいる友達や親戚と話す時に、共通の話題がないことに気づいた。」

日本の社会文化規範に基づき中国人の行動様式に対して否定的に評価することが多くな

り、中国社会への再適応が困難になった。

二人のCRはともに日本人と国際結婚をしており、日本国籍を取得したが、それぞれの定住に関わる要因については異なった語りが観察できた。しかし、「口が変わった」ことも、「交差点が渡れない」ことも、日本の生活によって生じた変化である。長年の接触経験を通して食習慣または行動や思考様式が変化した結果であると言える。他の要因にも総合的に影響されながら、日本に定住を決めたわけではあるが、現在の生活に対する満足感および母国への再適応の困難さは二人に共通して言えることではないかと考えられる。

4.4. 現在のネットワーク

日本の国籍を取得し、定住を決めた二人のCRは普段どのような領域のネットワークに参加し、どのような意識で参加しているか、また日本語の使用についてどのように意識しているか、以下からは（1）公共領域、（2）職場領域、（3）交友領域、（4）家庭領域に分けて述べる。

4.4.1. CR1

(1) 公共領域

CR1が参加している公共領域は主に駅前のショッピングモールである。CR1は仕事のない日は、駅前のショッピングモールで買い物したり、喫茶店で本を読んだりしているという。ここでの日本語使用は主に喫茶店での注文である。しかし、注文場面で使用する言葉は決まっているパターンがあり、CR1は日本語使用に対して管理することは特になく、「注文って、言葉は大体決まっているじゃない？これとこれお願いしますとか。(ER:確かに）（笑)。だから、店員に聞き取れるように礼儀よく言っているだけ」と報告している。つまり、日本語自体に対する管理はなく、丁寧な口調ではっきり言うことで、意味伝達を図るようにしているということである。

このように、CR1が参加している公共領域での日本語使用は非常に限られており、言語面における管理意識は薄いことが分かった。

(2) 職場領域

CR1は現在、食品製造工場と老人介護施設の二箇所でパートの仕事をしている。食品製造工場は留学時代から勤めてきた会社であるため、従業員の中で一定の地位を築いてきた。普段は仕事の指示などをすることはあるが、それ以外の時間では個人的な付き合いを避けていると報告している。一方の老人介護施設は日本国籍を取得してから勤めはじめた職場である。この職場においても、同僚との個人的な付き合いを避けていると報告している。CR1は「職場は働いて給料をもらう場所だから、同僚と仲良くならなくてもいい」と考えており、職場での付き合いは業務連絡に留まっている。

日本語使用については、特に高度な日本語能力が求められていないため、意味伝達ができれば十分だとCR1が述べており、例11のように管理しようとする意識はほとんどないという。

例11：「訛りがあることは知っている。けど、中国人の訛りってなかなか直せないじゃない？（ER：確かに訛っている人が多い。）だから、まあ、言いたいことが伝わ

ればいいんじゃない？」

ただし、意味伝達においては、下記の例12のようにCR1の直接的な意見表明に対して同僚に注意されたことがあり、それ以来CR1は失礼のないように言葉遣いを管理していると報告している。しかし、日常会話での日本語には問題がないとCR1は考えており、日本語で口論することもできるという。このように、CR1は言語面での外来性に対する管理よりは、社会言語的な外来性に対して管理していることが分かった。

例12：「昔、会社で試食会があって、（ER：うん）同僚が作った料理について感想を言い合っていた。私は「試食会だから、料理に対する感想を正直に言うべきだ」と思っていたから「おいしくない」と言った。（ER：お。）しかし、別の同僚が、「仲間が一生懸命に作った料理がおいしくないと言うのは失礼だよと言われた（ER：あー、確かに。じゃ、どうしたら）。例えば「今日の素材が新鮮ではないかもれないねとか、否定したい時は人に対してではなくて、物に対して遠回しに言うべきだ」と言われた。」

(3)　交友領域

CR1が付き合っている友人として報告されたのは3人の中国人である。それでも普段は仕事や家庭で忙しいため、たまに連絡して食事する程度に過ぎない。また、日本人との付き合いは家族以外にないと報告している。職場領域での報告と同じように、CR1の「日本人の友人を作る必要がない」という考えをはっきりと覗うことができた。この考えは、CR1が来日時の「自らの力で道を開くしかない」という意志の表れであることが分かる。

(4)　家庭領域

公共領域、職場領域、友人領域を通して、日本人との接触を控えているCR1にとって家庭領域は唯一頻繁に日本語を使用する場面である。娘は来日して間もないため、中国語で会話をするが、夫とは全て日本語で話している。また、二人は日本語学校時代からの付き合いで、CR1の夫はCR1の日本語能力をよく知っているため、話の内容が理解できれば特にCR1の日本語を訂正しない。CR1も夫を意識することなく、自由に日本語を話しているという。「多少（日本語を）間違えても、（夫に）理解してもらえるから、一々訂正しない。私も必要がないと思っているから」というCR1の語りにあるように、二人とも意思疎通を重視し、日本語の誤用を問題視しない傾向にあることが分かる。

4.4.2.　CR2

(1)　公共領域

インタビューで聞いた限り、CR2は日本語の発音がよくテンポも遅めで聞き取りやすい。アクセントやイントネーションも母語話者に近く、公共領域での会話においても言語的外来性は少ないと考えられた。CR2自身も意味伝達に困難を感じることはほとんどないが、声の調子とイントネーションに気を付けているとインタビューで報告している。CR2が話している日本語は子供のようだと友人やCR2の夫によく言われたため、本人も気にするようになったという。実際に、下記の例13のように病院に電話する際に、CR2は看護師に子供と誤解されて、電話を親に代わるように言われた経験もあり、声の調子とイントネーションに対する管理意識がより強まったと報告している。しかし、電話セールスにあった場合はこの声の特徴を意図的に利用することもある。

例13：「昨日、近所のパン屋さんで菓子パンを買ってきて食べていたら、なんかゴム手袋の破片みたいなのが出てきて（ER：えっ、そんな）。しかも、少し食べたみたいで、すぐ病院に電話して状況を説明したら、そしたら、受付の女性に「あなたは何歳ですか。お名前は」と子供に話しかける口調で聞かれた（ER：そうですか）（笑）。私の声は細いから、特に電話の場合は余計子供っぽく聞こえるみたい。（ER：うん、録音もそうでしたね）（笑い）。そう、ただ、セールスを断る時に「ママがいません」と言うと、成功率は100％だよ（両者笑い）。」

(2)　社会領域

CR2は就職してから7年間も同じ会社に勤め続けてきたため、職務内容を熟知しており、人間関係もうまくいっている。職場では、CR2を除いて全員が日本人であり、建築業のため、女性の同僚は少なく仲がよい。休憩時間のみならず、休日にも連絡しあう仲である。話題に関しては、仕事の話題はもちろん、ほかに世間話や身の上話なども話し合える。同僚でありながら、友人とも言える親しい関係にあると言える。

職場の同僚とは親密な関係であるにも関わらず、CR2は同僚との会話において、日本語母語話者の規範に従って管理しており、さらにより「日本人らしい」表現を使用したいと報告している。例えば、漢語や教科書で習ったような表現ではなく、より生活の中で使用されている表現や、より適切なニュアンスを表すために和語や擬音擬態語を優先的に使用したいと意識している。また、話題によって教養のある人、あるいは女性らしさを示したい時は丁寧語や美化語を使用することで調整していることも報告している。

(3)　交友領域

CR2の場合、個人的に付き合っている友人は、大学時代に知り合った中国人の友人が5人と、夫を通して知り合った2人の日本人であった。普段はみんな仕事が忙しく会えないが、時間が取れた時は集まって食事をしたり、家に遊びに行ったりしている。

友人との会話でも他の領域と同様に、基本的には日本語母語話者の言語規範に同調的な姿勢を示し、「日本人らしい日本語」を使用しようとする意識が強いことが報告されている。

(4)　家庭領域

CR2は結婚してから夫婦二人で都内のマンションを借りて暮らしている。CR2の両親は中国で生活しており、電話やインターネットを通じて頻繁に連絡している。夫の両親と姉は、距離の離れた場所で暮らしているため、普段CR2夫婦と会うことはないという。

CR2は日本語習得の意欲が高く、知り合った当時から夫に日本語の訂正を求めていた。そのため、文法的な間違いのほかに、アクセントやイントネーションなど、日本人らしくないところもCR2の要求に応じてCR2の夫に訂正されてきた。

このように、各領域においてもCR2は日本語母語話者とのネットワークを中心に参加しており、相手規範に合わせて行動し、「日本人らしい」日本語を使用したいという意識下で接触場面に参加していることが分かった。それについてCR2は、「せっかく日本に来ているのだから、できるだけ多くの日本人から日本語を学んで、完璧を目指したい」と述べていることから、高い言語習得意欲が伺えた。

5．接触場面に向かう管理

以上の分析を通して二人の居住者の日本移動の目的を明らかにし、さらに現在参加し

ているネットワークでの言語使用意識が分かった。ここでは以上の結果を踏まえた上で、CRが接触場面に向かう管理の記述を試みる。

5.1.　言語的外来性に対する管理

(1)　意思疎通を目標として、言語的外来性を管理しない（CR1）

生活環境を改善したいために来日したCR1の場合は、意思疎通に支障がなければ言語的な外来性を管理しないことが分かった。CR1が自分の発音やアクセント上の外来性に対して留意したことはあるが、回避できない存在であると評価している。また、CR1は日本語の学習経験を持っているうえに滞日期間も長いため、日本語での意思疎通はほぼ問題なくできる。このように、接触場面において「意思疎通を目標としている」と考えているCR1は、言語的外来性を管理しようとしない。

(2)　日本人らしい日本語を目標として、言語的外来性を減らそうと管理をする（CR2）

一方、日本語や日本文化に興味を持っているCR2の場合は、母語話者レベルを習得の目標としているため、言語的外来性は当然回避すべきものとして接触場面で管理しようとしている。「日本人らしい日本語」を目標としているCR2は、「日本語の教科書で習った表現って、普通の日本人は全然使わないじゃない？」と語っており、教科書の言語表現を否定的に評価していることが分かる。そして、接触場面において、そのような教科書の言語表現に留意して調整するようにしている。ほかに、漢語より和語を使用することや、擬音擬態語や複合語を使用してより適切な意味を表現しようという管理も行われている。さらに、母語話者である夫に訂正するように支援を求め、アクセントやイントネーションまで管理する対象となっていることが分かった。

5.2.　社会言語的外来性に対する管理

(1)　直接的な言い方を避ける（CR1）

接触場面の意思疎通を目標としているCR1は、自分の外来性に対する管理意識が特に弱い。しかし、試食会についての語りから、CR1の社会言語的外来性について、他の参加者である母語話者に留意され、「仲間が一生懸命に作った料理がおいしくないと言うのは失礼だ」と注意されたことがあった。それ以後、CR1は「失礼のないように直接的に事をいわない」と管理しようとしていることが報告された。

インタビューでは、CR2からの社会言語的外来性に対する管理の報告は見られなかった。CR2は自身の社会言語的外来性について既に解決されたと考えている可能性もあるが、外来性の存在に留意できていない可能性もないとは言えない。

5.3.　社会文化的外来性に対する管理

(1)　日本の社会文化的規範に協調的な姿勢を示す（CR1とCR2）

日本の社会文化に対して、二人のCRは母国の社会文化と比較することによって、肯定的に評価し文化適応ができていることが分かった。接触場面に参加する際に、行動面においては逸脱しないように管理していることが分かった。また、日本の社会文化規範を習得できていない同国人の逸脱に留意し、否定的に評価していることもあることが分かった。このように、CR自身に対する管理からも、他人の逸脱に対する留意からも、二人は日本

の社会文化規範に協調的な姿勢を取っており、それにしたがって接触場面に参加していることが分かる。

(2)　母国の社会文化的規範から距離を置く（CR1とCR2）

社会文化的外来性については、二人の居住者の語りから11年間の接触経験によって日本の社会文化的要素の習得が進んでいることが分かった。特に、日本の社会文化規範まで習得し、それに基づいて母文化への評価を行っていることも多くあった。例えば、母国の人間関係や社会秩序などに対して否定的に評価するようになり、再適応することができなくなることはその現れであろう。

以上のように、日本の社会文化的要素に対する肯定的評価によって社会文化の習得が進み、CRの定住にかかわる要因となったと考えられる。また、言語的外来性は解決できない問題であると認識しているCR1もいれば、解決すべき問題であるとして認識しているCR2もいる。それによって、接触場面に参加する際に、言語的外来性を管理するか、どの程度まで管理するか、言語管理行動において違いが表れることが分かった。

6．まとめ

本稿では、日本に11年間滞在している中国人居住者の移動の過程とそれに関わる要因を分析し、留学から定住までの生活環境の変化及び現在のネットワーク参加状況との関連を見てきた。その結果、留学の要因から定住の要因までは人によって異なると思われるが、移動前の生活状況に対する不満と移動後の可能性に期待を持っているという点から考えると、一定の共通性が見えた。また、日本への定住についても、日本の社会文化を習得したことで、母国への再適応を困難にしたことが二人から認識できた。さらに、日本人の行動や規範まで習得したいかどうかがネットワーク形成に強く関わっており、日本語習得にも影響を与えていることが分かった。言語習得の意欲や目標の違いによって、言語的外来性を管理するかどうかが違ってくることが分かった。

今後は、さらにデータを増やして中国人居住者の接触場面に向かう管理の研究を追求すると同時に、実際の接触場面会話における言語管理とのつながりを明らかにしていく必要があると思われる。

参考文献目録

江淵一公（1988）.「帰国子女のインパクトと日本の教育 ―「帰国児を生かす教育」の視点から」『社会心理学研究』3 pp.20-29 日本社会心理学会.

フェアブラザー，リサ（2003）『接触場面と外来性 ― 母語話者のインターアクション管理の観点から ―』千葉大学大学院博士学位論文.

林　春男（1987）「“Japanese American” の成立」『実験社会心理学研究』27 pp.1-14 日本グループ・ダイナミックス学会.

金子信子（2006）「外国人居住者による書き言葉使用場面参加のストラテジー ― 生活場面インタビューの事例より ―」村岡英裕（編）『多文化共生社会における言語管理　接触場面の言語管理研究 4 社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書』129集 pp.13-35 千葉大学大学院社会文化科学研究科.

今　千春（2011）「日本の韓国人居住者の外来性管理 ― 通時的・共時的分析の試み」村岡英裕（編）『接触場面・参加者・相互行為 ― 接触場面の言語管理研究 9　人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』238集 pp.51-67 千葉大学大学院人文社会科学研究科.

ロメイン・スーザン（著）土田　滋・高橋留美（訳）.（1997）『社会のなかの言語 ― 言語社会言語学入

門 Language in Society An Introduction to Sociolinguistics by Suzanne Romaine』三省堂.
村岡英裕（2006）「接触問題における問題の類型」村岡英裕（編）『多文化共生社会における言語管理 ― 接触場面の言語管理研究 4　社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書』129集 pp.103-116 千葉大学大学院社会文化科学研究科.
村岡英裕（2010a）「接触場面における習慣化された言語管理はどのように記述されるべきか：類型論的アプローチについて」（村岡英裕編）『接触場面の変容と言語管理 ― 接触場面の言語管理研究 8 人文社会科学研究科研究プロジェクト報告集』228集 pp.47-59 千葉大学大学院社会文化科学研究科.
村岡英裕（2010b）「接触場面におけるコミュニケーション ― 日本に住む外国人の言語管理を通してみた言語問題の所在」『日本語学』Vol.29-14 pp.153-169 明治書院.
Neustupný, J.V.（1985）. Problems in Australian-Japanese contact situations. In J.B. Pride（Ed.）Cross-cultural encounters: communication and miscommunication pp.44-84 Melbourne: River Seine.
奥田道大，田嶋淳子（1993）『新宿のアジア系外国人 ― 社会学的実態報告』めこん.
奥田道大，鈴木久美子（2001）『エスノポリス・新宿／池袋 ― 来日10年目のアジア系外国人調査記録』ハーベスト社.
大久保孝治（2009）『ライフストーリー分析 ― 質的調査入門』学文社.
塞漢卓娜（2011）『国際移動時代の国際結婚 ― 日本の農村に嫁いだ中国人女性』勁草書房.
田嶋淳子（2010）『国際移住の社会学 ― 東アジアのグローバル化を考える ― 』明石書店.
法務省（2013）「在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表2012年末」2013年 6 月20日公表，表番号 12-12-01-1，法務省ホームページ＜http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001111233＞（2013.7.4 現在）.